

科学用語の問題

石原 純

我々の学生時代には、大学の専門学科の講義に出て来る術語にはすべて外国語がその儘使用されていた。多くは英語かドイツ語かであったが、中には文章までも英語で述べられてそれを筆記させられたものもある。日本語の書物といつては、その程度のものは全くなかったので、時々雑誌などで日本語としての術語を見るのがせいぜいであった。だから、その頃は妙な術語があつても、さほど問題にする必要もなかったわけであるが、近頃では事情は大いに変つてゐる。ずっと水準の高い書物までも日本語で出るようになったし、従つて実際に日本語としての術語が使われる機会を非常に増しているだけに、それらが適当に選ばれること、並びに一定されることが切実に要求されねばならないようになった。

ところで、日本語としてどんな術語が適当かという問題に関しては、非常な困難が根本的に横たわつてゐる。それは周知の如く、今日一般に日本語を記すために漢字が用いられてゐるといふ点に結びつくものである。実際にごく少数の術語には外国語音をその儘取り入れたものが用いられてゐるが、その他は殆どすべて漢字による熟語が形作られるのである。純粹の和語を利用する場合も稀にはあるであろうが、大多数の場合に和語では不便であるように習慣づけられてゐる。そこで、新しい漢字熟語が氾濫するようになるのであるが、中には随分奇妙な漢字の使い方もあるし、またそれ以上に困ることは同音異義の術語がたくさん現われることである。之等に対して我々がいかに処置するのがよいかということは、現在に於て非常な重要な問題であると考えられる。殊に新術語をつくる

必要に出遇う人々に於ては、将来之これによつて起るような不便を出来るだけ避けることが、当然の良心的な義務であると思われる。

それで私は、少くとも現在に於て我々が科学上の熟語採択に関して守るべき根本方針について次に少しく述べたいと思う。

一、国際的に一般に行われている術語で、且つその意味を適切に日本語であらわし得ないものは、外国語音を採用すること。例えば、物理学に於ける「エネルギー」、「エントロピー」等。この場合にエネルギーはドイツ語音を採つたものであるが、なるべく日本語化しやすい音を採用するのがよいと考えられる。

国際的に一致しているものでも、簡単にその意味を日本語で示し得るものは翻譯した方が一般にわかり易やすくてよい。例えばアトムを「原子」、エレクトロンを「電子」とする如ごときである。

二、日本語としては、なるべく和語を使用するのがよいが、現在では習慣的にも術語らしくなくなると云うような嫌いもあるから、漢語をつかうのは止むを得ないであろう。併しかし出来るだけこなれた使い方に従うこと、同音異義を避けることは大いに必要である。古い時代に出来た「電池」などという語は実にこなれたおもしろい術語だと私は思っている。近頃ではそういう傑作はなかなか生れない。むやみに無理な直訳をやるうとするからである。「電磁光論」などという語が使われているが、一寸見ると電気と磁気と光りとを論ずるようで、実は光りの電磁的理論を意味しているのである。こんな無理な使い方は止めて、せめて光りの電磁論とすべきである。「物理化学」などというのも同じ類に属する。又「化学」が「科学」と同音で、話の上で非常に不便を感じるのには、先頃も問題にせられ、私は「化学」の代りに「物化学」という語を提唱したが、専門学者はなかなかそんなことに振り向きもしないのは、実に困った事柄と思う。

或る場合には、外国語音をもじつて漢字で示すのがある。金相学で、パーライトを「波来土」、オーステナイト

を「大洲田」、マルテンサイトを「麻留田」などと称しているが、之等は単に語音を漢字で示したと云うのではなく、それぞれ波打ち際の模様や、大きな河口の洲や、麻の葉の組織に留っていることを意味するのだと云うに至っては、既に唾棄すべき一種の駄洒落で、術語採択の甚だしい邪道である。之等は素直に仮名で記すべきだと思ふ。

第二の重要な問題としては、術語を出来るだけ一定にすることである。既に相当に広く行われている術語に対して、それが不都合であるというさほど重大な理由もないのに、他の新しい術語を以って代えるというようなことは、出来るだけ避けられた方がよいと思ふし、また同一の意味の概念に対して異つた分科でそれぞれ異つた術語を用い慣れている場合にも、之を何とか協定して一致させることが必要であると思ふ。例えば物理学で「電気感応」、「磁場」、などと称しているのを電気工学では「電気誘導」、「磁界」などという。数学や物理学で「常数」というのを化学では「恒数」という。この種の相異は現在かなり多数に存在する。かような事情は、術語の採択が各学科で独立に行われたことに由来するのであるが、それらが相互に交渉するに従つて實際上の不便は益々深められるわけである。しかも各分科に属する学者たちは、既に多少とも自分で使い慣れたものに固執する傾向があり、互に意地を張つても他のものには従おうとはしない。これは実に狭い量見で、且つ長く将来に禍を残すものであるから、なるべく速かに学会の間に協定機関を設け、互に一致させるように努めなければならぬと思われる。すべての言語は使用の習慣によつて確立してゆくのであるから、今日以後年月を経れば経るだけ、かような協定も困難を増すのであつて、今でも既に遅いくらいであり、ぜひとも現在の緊急な問題として取り上げねばならないのであると考えられる。

今日では中学校以下の初等教育で使用している科学術語は、大体一定しているように見える。併しそれらの術語さえ、或るものは専門的には無視されてしまうのである。上記の「電気感応」の如きはその一例である。同じ意味をもつ術語が幾通りもあり、使用者の系統によつて違ふなどということは、外国には殆ど見られないのであつて、之

は日本に於て外国語を各別々に翻訳することから起つたものであるが、外国人から見れば奇妙な若くは滑稽な事実で、大きく言えば一種の国辱とも見られはしないであろうか。私はそれぞれの学者が狭い量見を一掃して、何とか協定の道を開くことを切実に希望しないわけにゆかない。各学会で個々に術語を選定することは既に或る程度まで行われているが、この事が進行すればする程、却て上述の協定を困難にする虞れがあるので、私は各学会に於ける術語選定は決して独立に行わずに、必ず関係諸学科を綜合して行うことの必要を特に警告したいと思うのである。

(昭和十二年二月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館 「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。